

小田原史談

第 139 号

発行所 小田原史談会
小田原市本町1-6-20

新しき年号、新しき年 過ぎしもの、美しきもの

天地有情春合に識るべし
今年今日又歎びを成す

夏目漱石

本年の干支は午である。そこで新年にあたり、井上三綱氏の馬の絵を掲げる。馬が日本史に登場するのは中国の『魏志倭人伝』に次のように誌されているのが初めてではないだろうか。

「その地(倭国のこと)には、牛、馬、虎、豹、羊、鵠無し」とある。つまり古代日本には馬は居なかったと誌している。しかし、縄文遺跡からは、「馬齒」の出土があり、野生馬の存在を示している。ただ倭人が家畜として利用しなかったのであろう。時代が下って古墳時代になると馬具類の出土が多く見られるが、それはほとんどが大陸から輸入されたもので、馬の使用は貴人階級に限られたものである。飛鳥時代いわゆる万葉時代には掲

出の絵のように、装飾或いは祭事用の姿で登場する。そしてこの絵には三綱氏の手になる万葉歌がつけられている。

歌の意は「表に馬の足音がするので、あの方がおいでになったのかと、松の陰に走り出た」とこれは男を恋うる女の歌である。『万葉集』巻十一にはこのような男女の愛情を歌った詠人知らずの歌が多くおさめられている。

さてこの絵の作者井上三綱氏について少し触れてみよう。三綱氏は明治三十二年、福岡県八女郡、現今の筑後市に生れた。

絵は坂本繁二郎画伯に師事し、そのゆえか初期の作品には、馬の絵があ

る。小田原市役所階ロビーに掲げられた大作「馬市の図」も初期のものである。昭和元年、小田原に来住酒匂小学校の訓導となった。そののち各校の絵の教員をつとめて小

田原には馴染みの深い先生となった。従って三綱氏に師事して小田原画壇に花を咲かせた郷土画家の数も多いのである。

三綱氏の絵には東洋の美意識がうかがわれ、ことに万葉集にモチーフを得た数々の絵には優れたものが多い。小田原市が所蔵している「桃李美人図」は唐代の樹下美人を思はせ、小田原市ではこの絵を陶板に焼きつ

けて飾り皿とし、多くの市民に記念品として贈ったことがあるので、小田原市民には馴染みの深い絵である。なお昭和五十五年には小田原市から文化功労賞を受賞している。

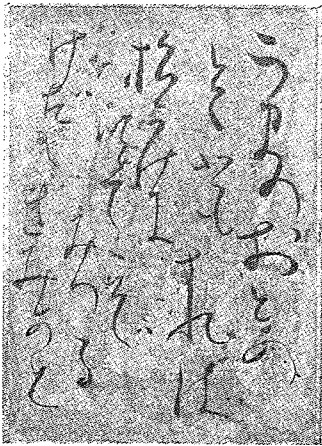
三綱氏はまたアメリカにおいて度々個展をひらき、日本よりむしろアメリカでの画名が高いといはれる。小田原では画家として名を知られているが、実は絵だけでなく、書にも秀で気宇壮大、雄渾なその筆勢には見る者をして飽くことを忘れさせる。残念ながら三綱氏は先年物故されたが、彼の手になる書は、小八幡の三宝寺

と久野の東泉院の大門の寺号となつて今も力強い正気を放っている。(高田喜久三)

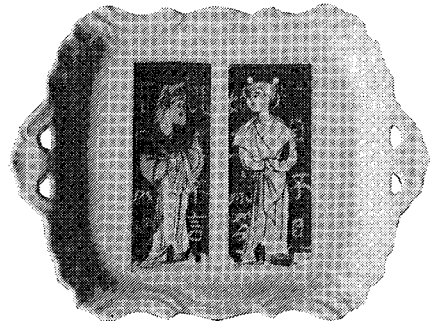
馬の音のどともすれば松陰に
いでてぞ見つる蓋し君かと

『万葉集』巻十一

作者不明



井上三綱画『古事記・萬葉集』より



明治以後小田原劇場物語(五)

石井富之助

5 復興館

大正大震災後、新たに二つの映画館ができた。一つは復興館、一つは娯楽館である。

復興館は富貴座開場に先だつ大正十二年(一九三三)十二月、角田久五郎によって万年四丁目(青物町)に建設され、日活映画を上映した。

震災後の自由華やかなりし頃の日活映画

足にさわった女、おすみと母、狂った一頁、塵境、本

牧夜話、日輪、陸の人魚、

京屋様店、狂恋の女師匠、

国境を護る人々、この母を見よ、生ける人形、女性讀、

椿姫地球は廻る、灰燼、日本橋、唐人お吉、人の一生

などの現代物、尾上松之助から河部五郎、大河内伝次郎と続く京都太秦撮影所の時代劇はすべてこのスクリーンに写し出された。

こうして、昭和十四年東宝館が出現するまで富貴座とともに両館併立時代を作ったが、東宝館建設後もますます繁栄し、昭

和二十年富貴座と同様に戦災で焼失した。

しかし、同年の十二月には早くも開館し、依然日活映画を上映したが、昭和二十八年十二月に至り、鉄筋コンクリート建の近代映画館を建設して、大映

東映の上映館となり、名も国際劇場と改めた。そして、昭和三十

五年には太陽企業株式会社経営となり、小田原日活と改称し、

再び日活の映画館となったが、昭和五十八年閉館となった。

6 娯楽館

娯楽館は震災後、幸二丁目(代官町)御幸の浜海水浴場へ行く道の左側にできた。帝キネ

映画の常設館で、各社競作で全国映画ファンを熱狂させた沢蘭

主演の「籠の鳥」は、ここで上映された。当時、映画に琵琶

を入れることが大流行で、活動琵琶などという言葉が出たほど

であったが、娯楽館に「孝女白菊」という映画が来た時、頼ま

れてその琵琶の歌詞を作った。帝キネでヒットしたものは

帝キネでヒットしたものは

帝キネでヒットしたものは

「籠の鳥」でそのほかはあまりなかったためか、興行成績は芳しくなく、いくばくもなくして閉館、その後、一時寄席席竜館となったが、昭和六年九月に火事で焼けた後は再建されなかった。

7 東宝館(東宝劇場)

大正九年に熱海線小田原駅が開通し、小田急、箱根登山、大

雄山鉄道などの私鉄がつつぎに乘入れると、むかしから小田

原の繁華街といわれた緑一丁目(須藤町)銀座通りと幸一丁目

松原神社附近との外に、駅前通り、錦通りなどの新しい繁華街

が生れた。これらは昭和九年、丹那トンネル開通に伴い、熱海

線が東海道線にきりかわると同時に、いちじるしい発展を見せ

はじめた。この機会をのがさず、緑一丁目(下幸田)に逸早く進

出したのが東宝館であった。昭和十四年の設立で、館主は山崎

宇三郎、東宝映画の常設館として開館したが、駅へ徒歩三分と

いう立地条件にめぐまれて好成績を収め、富貴座、復興館と

ともに三館時代を作るに至った。

終戦の時は、前一館とちがって戦災に遭わなかったため、昭和二十年九月には早くも開場し、

昭和四十六年十一月東宝劇場と改称し、今日に至っている。

8 戦後の映画館

戦後、富貴座、復興館、東宝

館の外に、昭和二十一年九月、本町通りの元吾妻座跡地に洋画専門のオリオン座が開館した。これで松竹、日活、東宝、洋画の四館が出揃い、それぞれ特色を発揮して、戦後の混乱期における市民の慰安娯楽の場となったが、昭和二十三年頃から松竹の準直営となって続き、さらに外面館となって今日に及んでいる。

越えて昭和二十六年講和条約

が成立すると、小田原の映画界は一層活況を呈し、昭和二十八年八月、緑一丁目お濠端通り(上幸田)にロマンズ座が開館

したのを皮切りに、復興館は前記のとおり近代的な映画館を新

築、昭和三十一年には東宝館の隣りに銀映座(館主山崎さち)

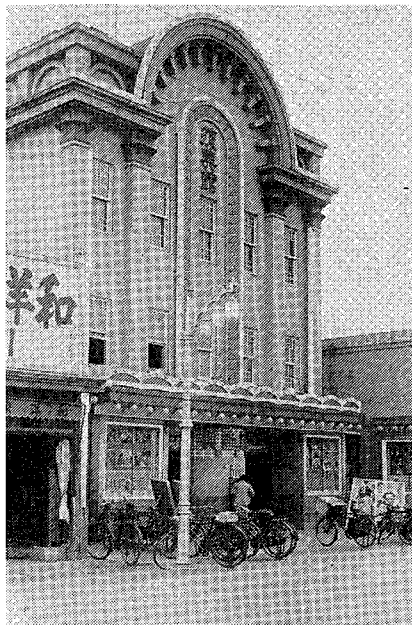
が建設された。また同年四月には幸二丁目(大手前)に外映専

門の中央劇場(館主渡辺重光)が鉄筋コンクリート建築の近代館として開場し、続いて国際劇場と中央劇場との中間に、東映劇場がこれまた近代設備を誇る館として同年十二月に開館した。そしてさらに昭和三十五年十二月には御幸座も映画館に転向し、本市中央部における映画館は八館を数えた。

三、演劇雑誌

1 小田原最初の新劇公演

わたしが早稲田在学中、たしか昭和二年の十一月頃のことであつた。学校で県立小田原中学校時代の同級生島田越にばつたり出会つた。島田は海軍大佐であつた中佐であつたか覚えていないが、ともかく海軍将校の息子であつた。今調べてみると卒業生の名簿に載っていないし、



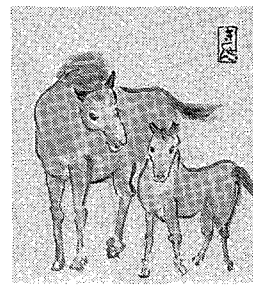
復興館 (昭和十五年)

小田原図書館蔵

年頭のごあいさつ

会長 相澤栄一

日頃の会員の皆様の御支援、御協力誠に有難う御座います。本年も又、皆様の御協力と役員の方々の御指導を頂いて、皆様の御期待に添うような、史談会活動を致してまいりたいと存じます。何卒御協力の程を御願ひ致します。会員の皆様の御多幸を心から御祈り致します。



小田原の友人の間でもはつきり知っていないので、多分小田中を中途退学したのであらうと思う。同じ早稲田に居ながら、その時までわたしたちは顔を合わせることがなかった。今どうしていると聞いたら演劇研究会をやっている。ちょうど築地小劇場で公演をやるから観に来てくれと言って入場券を一枚くれた。築地小劇場ではレフ・ルントの「真理の町」を演っていた。

わたしも若かったし、頼まれるとつい引き受ける性質も手伝って、小田原へ帰ると俳句のグループにその話をした。その頃、わたしは俳句をやっている、仲間には佐倉東郊、鶴塚鹿々子、鈴木蘇堂、津田久紫などがおり、町役場には後に産業課長になった柏木九刻もいた。わたしたちは「はこね」という同人雑誌を出し、すでにこの時には六十号ほど続けていた。俳句と新劇とは妙なとり合わせだったが、いわゆる文学青年の集りなので、よし一番やつつけろとたちまち公演を引き受けることにきまつた。準備もはかどおり、プロや合資券も出来上がった。そのプログラムを見ると、新劇と公演の夕、昭和三年七月二十一日、二十二日午後六時開演、会場御幸座、

主催原始座、後援はこね A、講演 福田正夫 長谷部孝 B、新劇 アントン・チェホフ 犬アルフレッド・スウトロ 路傍にあへぐ男 有島武郎 ドモ又の死 北村小松 火山に崇られ た話 山本有三 海彦山彦 演出、水木久美雄 島田秋彦 装置照明 島崎幸一郎

いよいよ公演もあと三、四日と迫った時、わたしは警察から突然呼び出しを受けた。何事だろうと思っ出て頭すると、この公演のことで、のっけから「一体新劇とは何だ」ときたのには驚いた。答えに困ったが一応説明すると、今度は「福田正夫は左翼だがどういふ話をするのか」ときた。福田正夫は以前アナキストだった加藤一夫と親交があり、その方面に足を踏み入れたことがあったからであらう。わたしは「福田は今では赤でもなからそんな心配はいらぬ」と答えた。しかしなかなか納得してくれぬ。陳弁にこれ努めてようやく許可をとり家に帰ると、今度は役場から来てくれという。やれやれと思いつながら出かける。役場の方は、島田ともう一人本間というのと二人だけでよいから俳優税を納めろというのである。冗談ではない、これは学生演劇なのだからといくら話しても許してくれず、払わなければ公演は認めないという。ええ面倒だとばかり納めたが、島田、本間ともに眞税俳優税二四六十六銭、町税雑種税附加税三四五十五銭ずつとられてしまった。この領収書は今でも持っている。これでどうやら公演ができることになったが、ともかくまるで資金がないのだから御祝儀な

ど思いもよらない。大道具など御幸座の道具方がそっぽを向いて気持ちよく働いてくれないのも無理がなかった。そこでみんなを呼び集めて手伝わせる始末、なんでも「海彦山彦」の小屋を作るのに、わたしの家からむしろを何十枚も運んだほどであった。いつであったか佐倉東郊にこの話をしたら「君のズボンを持ってきて海彦がはいたよ」と言った。ともかく苦勞に苦勞を重ねた。心配した観客も割合来てくれたので一同ホッとしていたところへ警官が十五名ほどやってきた。二階の一番うしろにズラリと並んで観ていたが、福田正夫の講演という時になると、警官二人を舞台へ上げろという。それは困ると抗議したが、聞き入れる相手ではなく、無理押しに舞台へ上がってしまった。今から考えると全く馬鹿馬鹿しい話だが、始めから終りまで苦しみ続け、それでもどうやら赤字を出さずにすませたのはせめてものことであった。小田原には大正二年富貴座に松井須磨子の芸術座がきて「復活」を演っているが、純粹な意味での新劇公演は原始座が最初のものであると言つてよいであらう。(続)

大正・昭和と 著名な文人と交遊のあった 小田原御幸浜・養生館主

西村隆一氏に聞く(二)

西村さんの家系

▲……勝三は、天保七年(一八三六)十二月九日、佐倉藩(十二万石)の支藩佐野藩(一万六千石・現在の栃木県佐野市)の江戸丸の内藩邸で、藩の付家老西村芳郁の三男として生れた。▼

前号では、紙面の関係から、以上のように途中で終った。

西村氏の付家老は、芳高・芳郁・茂樹と二代続くが、茂樹は勝三の長兄で隆一氏の大伯父に当る。

ここで先に茂樹についてふれると、彼は、文政十一年(一八二八)に生れ、明治三十五年(一九〇二)七十四歳の生涯を閉じているが明治時代の思想道家・教育家として名を留めている。

明治二年(一八六九)佐倉藩年寄役から佐倉藩大参事。同四年印旛県権参事・職を辞し上京家塾を開く。同五年『校正万国史略』翻訳出版。同六年森有禮を扶けて明六社を組織、続いて文部省五等出仕編書課

長。同八年『泰西史鑑』翻訳・三等侍講兼任(翌年辞任)。

同九年文部大丞・宮内省御用係・東京修身学社創設。同十年文部大書記官となり各地の学事巡視。同十二年文学博士・東京学士院会員。この年文部省『古事類苑』編纂に着手。同十七年東京修身学社を日本

講道会と改め会長に就任。同十八年東宮教育世話係。同十九年宮中顧問官。同二十年『日本道徳論』を発行・日本講道会を日本弘道会に改称。同二十一年華族女学校長(二十六年迄)。同二十二年から

三十三年迄の間、しきりに日本弘道会の地方講演に出かけ、道徳運動の輪を広げることになり。同二十三年貴族院議員(同二十五年まで)。同三十三年宮中顧問官辞任。

以上、主な履歴を並べただけでも、立派な業績を残した人物であることが分る。

彼の伝記は、いくつかあるが最近では高橋昌郎教授執筆の『西村茂樹』(「人物叢書」吉川

好文館刊)が出ている。以下大部分はこの書による。

彼は、明治初期は、洋学者として活躍しており、洋学者による西欧思想の啓蒙運動の拠点となった明六社は、森有禮に協力して組織化したものであり、また、文部省編書課長として、教育の西歐化を担った官吏であった。

明治五年(一八七〇)の学制制定について、西欧文化の摂取の意義を認めながらも、国民道徳に忠孝仁義について一言も触れていないことに疑念を持ち、それが原因で、やがては、西洋哲学によって修正した儒教を基礎とした道徳運動を展開しており、生涯教育運動の先駆者であった。

彼は、伝統文化を尊重しながら、斬新的に西欧文化を受け入れて、新しい日本文化を創造しようとする立場をとった。その点、福沢諭吉とは、考えが異なり、福沢が伝統文化の欠点を摘出し除去することによって西歐化を進めようとしたのとは、対照的である。

しかし、西村を守旧派とみるのは、当を得ていない。彼は、むしろ、軍備拡張は、国家財政を圧迫し、ひいては国民生活が犠牲となることを憂い、戦争はできる限り回避すべきであるという立場をとった。日清戦争の勝利を単純に喜ばなかったこと

は、福沢とは対照的であった。

西村が、道徳運動に一段と力を注ぐようになったのは、明治十八年(一八八三)、伊藤博文が太政官制を廃し内閣制度の創設に、維新以来の大改革と、大いに期待をかけたが、伊藤のとする欧化政策に失望してからのことである。西村が道徳運動を展開する

根底には、わが国の周辺にひしめく列強に抗して独立を保つには、近代国家形成の基盤である国民道徳を樹立し、民心を統一することが不可欠であるという信念があった。

なお、大正五年(一九一六)、十八歳で中編「貧しき人々の群」を『中央公論』に発表して、天才少女といわれた中条百合子(のち宮本)は、茂樹の次女(江の子)である。

(註) 付家老 江戸時代、監督や補佐などのために、幕府から新藩へ、または、大名の本家からその分家へつかわされた家老職。ふつう、先祖代々つかえている譜代家老より上位におかれていた。つけびと。

(註) 『日本国語大辞典』(註) 明六社 明治六年に設立したのでこの名がある。森有禮・西村茂樹の他に西周・中村正直・加藤弘之・福沢諭吉らが加わった。各方面で啓蒙する役割を果たした。明治八年に解散。

ところで、弟の勝三は、幕末か

ら明治初年にかけての変革期には、時代の波に浮き沈みする中を、ついには乗り切って、兄茂樹と同様、歴史辞典に名を残すだけの業績を残しており、それだけに、波瀾万丈の彼の青年期に面白さを感じない訳にはいかない。

しかし、それを記すと長くとなり、また、勝三の人物像が粗密となり、それに、全体のバランスが欠けるようなるが許しを頂くとして……。

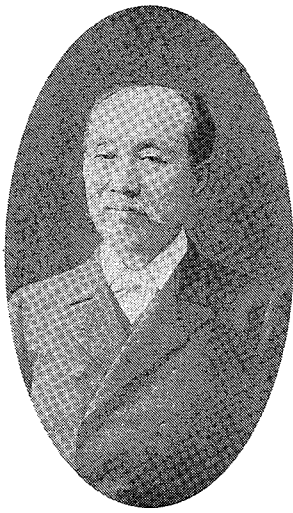
明治維新後、祿を失って、武士から商人になった例は珍しくないが、勝三は、既に明治維新の七年前の文久元年(一八六一)の二十六歳のとき、刀を棄てて商人となっている。

しかし、最初から好き好んで商人になった訳ではない。事の成り行きで、そうなったのである。

勝三の志は、武士としてそれも砲術家となることだった。彼は、三男のため武士になるには、他家の養子となるより他に方法はなかったが、父が付家老のため、嘉永三年(一八三〇)十五歳の

とき佐野藩に召し出され、人格二十四儀三人扶持の広瀬添番(補助役)に取り立てられた。二年後には近習に進み、さらに安政二年(一八二五)、砲術助教を命じられた。

勝三は、兄の茂樹と同じよう



西村勝三 (1836~1907)

に、佐久間象山の門に学んだことがある。勝三は将来、一流の砲術家となる夢を持っていた。安政三年(一八五〇)、長崎海軍伝習所第二次生が募集されると好機到来とばかり志願をした。しかし、砲術家の夢も消え、浪人となる破目に陥るのを知る由もなかった。

一緒に受けた弟の平四郎は合格で、勝三は不合格だった。理由は、勝三は、大胆で大まかな点があり、細部にわたる技術伝習を目的とする教育を受けるには不向きとされた為であるという。

だが、勝三は諦めなかった。密かに江戸藩邸を脱け出し、先任者と交替のため、長崎に赴く目付を、旅次途中の大阪の宿に追いつき、是非、伝習生に採用してくれと懇願した。目付は伝習所を総括監督する役目をも持っていた。

簡単に変更できる筋合のものではなかった。

望みを断られた勝三の落胆のほどが思い知られる。単に伝習生になれなかっただけではいい。勝手に脱落して来たため帰郷が許されなかったのである。

進退きわまった勝三は、その後、五年余り、つてを求めては諸々を転々とすることになる。この間、いろいろなエピソードがあるが、割愛するとして、勝三は、文久元年(一八六一)十月、縁あって岡田平蔵の許で働くこととなった。平蔵は江戸の鉄物商で、横浜に支店を設け外国貿易に従事する傍ら、神奈川奉行所の用達を勤め、兼て運上所今という税関で、輸出入品の鑑定評価を司る目利役をしていた。勝三は、その平蔵の目利役を手伝う書記役を勤めることになった。

その年の暮れのことである。運上所の倉庫が火災となり、オランダ人所蔵の小銃三百八十余

挺が被害を受けたが、被害もあまりたいしたこともなく使用できるので、勝三は、これを転売して千余両の利益を得た。

この投機的な商取引で味をしめた勝三は、清国より到来の朱に手を出した。朱は、幕府公認の朱座が一手で取扱う専売品であり、勝三の密売は、たちまち発覚して、文久二年(一八六三)九月、抜け荷買いの罪で小伝馬町の獄につながれた。裁判の結果は、「親類預け」となった。その裏には、兄平太郎(のち茂樹)の奔走がある。ところが平太郎は、佐野藩の付家老の地位であり、勝三を弟であると公然という訳にはいかず、藩出入りの馬具商の親類として、勝三をそこに謹慎させることになる。

ところが覇気のある勝三は、じつと謹慎しておられず、関心は常に横浜に向けられ、アメリカ商館にライフル銃の見本が到着した情報を聞くと、禁を破って横浜に赴き、商館の支配人と長銃二千挺、短銃三百七十五挺の買付けを予約、手付金一万ドルの融資を受ける先も決まり、加賀藩に売込む手筈が整っていたところ、文久三年(一八六三)二月、町奉行に捕えられた。勝三は謹慎中禁を破り、銃器売買に従事した罪により、石川島の人足寄場に、慶応元年(一八六七)五月特赦される迄の二年三カ月の

間収容されていた。

人間何が辛いのか分らない。勝三が、世間から隔離されていたのは、むしろ幸運なことであった。

その頃、外国人と取引する者は、売国奴として天誅を加えると、浪士から命を狙われていた時代である。

このことを、益田孝は次のように語っている。

あの渋沢栄一さんですら、当時は非常な鎖国攘夷論者で、文久二年(一八六三)横浜を焼払い、外国人を撃殺(皆殺し)しようという計画を立てた。これは実現しなかったが、まさにこんな世の中だった。横浜で商売をしておった高島嘉右衛門、西村勝三、岡田平蔵なども浪士に狙われた。しかし高島は外国人に小判を売った嫌疑で牢に入っていたから難を免れた。西村も何かの嫌疑で牢に入っておったから助かった。岡田は牢に入っていないから、たから、しばしば危険が迫った。(『自殺益田孝翁伝』)

しかし、戦塵も収まり、明治維新政府の世になると、再び戊辰前後のようにポロ儲けという訳にはいかない。新しい事業に手を染めるが、失敗の連続で蓄えた儲けを吐き出す形となった。失敗した新規事業は、十五、六に達する。

益田孝は、勝三の葬儀に際し、「幾多の新事業を外国から輸入し、しばしば失敗したが、これに屈せず、人を咎めず、世を恨まず、逆に成功を収めた。そして富貴におもねらず、権門に走らず、独立不羈の生涯を送ったが、誠に得がたい有徳の工業家である」と弔辞を述べている。

成功を収めたのは、製靴、製革と耐火煉瓦の製造事業で、耐火煉瓦については、今も当初の名の、品川白煉瓦のまま事業が継承されている。

成功を収めたといっても、文字通り苦心惨憺の結果で、それぞれにエピソードがあるが、紙数の関係もあるので、製靴事業については簡単に触れてみると、その経緯は、大村益次郎との出会いから始まる。

戊辰戦争で、勝三は、徳川家及び諸藩の脱走兵を庇護し、また佐野藩士を煽動したことがばれて、東征大総督府に拘引されるが、軍防事務局判事大村益次郎により赦免された。勝三が役に立つ人物であるのを見込んで

のこともあろう。

これを機に、総督府のほか、軍務官・兵部省の用達を命じられることになった。明治二年(二六九)、勝三は、大村より軍靴の納入を命じられた。丁度、横浜運上所に眠っていた軍靴を納入したのである。旧幕府がフランスより購入したものの、足が短く甲高の日本人には適せず、使用できるものではなかった。

交友のあった文人たち

――さて、西村さんが歩んでこられた道をお聞きしたいのですが。

その後間もなく、大村は刺客の手に倒れたが、大村が生前、新しく創設の軍隊は、洋式の訓練をするが、服や靴を輸入していたのでは国家の損失が大きい。お前ら商工業に従事する者は、よろしくこの業を創めるべきである、と、遺志とでもいうべき

「大正五年、小田原町立第一小学校の高等科一年を終ると、小田原中学校に入學しました。ところが、大正八年に親爺が亡くなったものから、二年で退学したところ、北原白秋さんがねえ、うちにやって来たんだ。

明治の大海嘯

――会報二三八号に前半をのせましたが、その続きは次のとおりです――。

この日は、風もなく、ただ時々物凄い驟雨が降り、雨が止めば、日がさすと云う、変則的な天候だった。しかし打上げる大波は往来(国道一号线)からも見えたと云う。俄に人声がさわがしくなり突然「逃げる逃げる」の大声があちらこちらから聞え、駭(きょう)のあまり飛び出して見ればこ

言葉を承けて、勝三は、製靴の事業に乗り出すことになる。

勝三は、先に挙げた三つの事業の他に、いろいろ社会に奉仕しているが、紙数の関係から割愛しよう。

石井福太郎

はいかに大山のような大波が水煙りを上げて、あとからあとと打続きそのすさまじさ、あつと云う間に逆巻く怒濤は家を潰し、往来に押し出し、或は流れ出す家屋、助けを求める人の声、忽ち阿鼻(あび)きょうかんの地獄と化した。

「註」白秋は大正七年二月に小田原に在住、始め十字町のお花畑(南町三丁目五番三号)に住む。桐谷は早稲田大学の講師をしていましたが、北村透谷をして、その名にあやかっていたですね、桐谷としたらしいですね」(岡部忠夫)

真鶴・湯河原方面で用いられている「島寄り」という言葉

です。この頃分ったんです。大正七年三月五日に……。これはね、大正八年九月号の『新潮』に載っていますが、小田原図書館長の川添さんが教えてくれたんです。

あるいは、うちを指してやって来たのは、私の叔父の河野桐谷の紹介ではなかったかと思うのですが……。もっとも、その点の資料はないので分らないんですが」

ある。船頭辻村梅吉、大津磯吉、船にて残らず救助すとの。又山王神社に逃げ込みたる者、乞食親子を入れて十二名、この十二名を救助する為、柳下倉吉氏は荒れ狂う怒濤の中へ飛び込み板切一枚につかまり中島まで泳ぎ、流れ着いた船によって十二名を助けるに至った。当時神社の横に大きな樺の木があり、その樺によじ登って倉吉夫婦は助かったと云う。この樺の木も大正年間になって伐採し今は根株だけがあとを留めている。又この樺の木で今の神社の廻り縁を造り、現在ある新しい神輿と山車が造

「私は大海嘯の時はまだ子供だったが、あの恐ろしい事は年を取るによって、よけいに感じる様になった。自分の家の横通りは浜に行く広い通りだった。あの日突然大波の水しぶきが何とも云えぬ物凄い勢いでザアアと家にたたき当たった。その異様

な音に家族一同生気を失っている瞬間、大波は怒濤の勢いで家の中へ飛び込んで来た。あつは夢中で親の背中におんぶされ弘経寺に避難したが、すでに弘経寺門前で大人の胸たけも水があり、又それから光明寺まで逃げた。あの時のこと今思い出すごとに身の震える思いがする」と。避難者は第二第三と避難先をかえた為、あとになって家族捜しでこれ又大騒ぎをしたとか。若しあの大海嘯が夜だったららと思うと身のすくむ思いである。――私の家に一本の大樺がある。切るなど云われている――

和田登記

幕末、中島・本久寺に

住持された成貞尼について(四)

小野意雄

四 シーボルト事件

1 旅立ち

成貞の墓碑銘は、「故遊閑左止乎此地」と記し、小田原に來た事由について、「故ありて閑左に遊びこの地に止まりて」としか述べておりません。彼女が京都を離れ、旅をするに至った契機の一つとして、父武者小路実純の死がありましよう。文政十年(一八二七)成貞が三十五歳(三十八歳)の春四月のことです。父徹山の若かりし日の旅の跡をたどって見たい、後深草院二條尼の「とわすがり」の世界の追体験の思いが、彼女を促えたとしてもおかしくないでしょう。しかし、彼女の場合は、「とわすかたらず」の生涯でしたが。

「とわすがり」は、桂宮所蔵本です。成貞が、光格天皇の「内ノ女房」の一人としますと、盛仁親王が文化七年(一八〇〇)桂宮を相続されたということもありますから、この「本」に接していないことはないでしょう。彼女は文学好きであり、趣味豊かな女人のようですから、殊更です。自らの人生に絡めて、二條尼の世界を描いていたことでしょうか。

旅立ち、文政十二年(一八二九)の夏のことと思われる。『箱根御園所日記書抜 中』に、「文政十二年九月二十八日、清水谷中納言様御娘豊姫様御本丸江御引越下座」とありますが、清水谷実楯女「豊姫」はこの時十七歳、徳川家上臈入りし、「瀧園」になります。成貞は、この一行に同行して、東下りしたものと考えられます。そして、飛鳥井家ゆかりの義弟の不退堂聖純も随員の一人と

して同行させたのでしよう。豊姫一行とは、江戸に入ってから別れ、まずは谷中の宗林寺に足を留めたことでしょうか。頼る先は大久保忠真、恐らく打ち合わせ済みの旅だったと思います。

『類題新竹集』(猿渡谷盛編著)につきのような詠歌があります。

名所秋

むさし野の 萩わけゆけば 紫の

露のみだれも かぎりしられず

成貞尼

また「春鶯集 堀川後渡百首題の中に」

忍恋

人間はば 露とこたへて 消えなまし

つつむにあまる 神のなみだを

忠真

2 シーボルト事件に巻込まれて

『おだわらー歴史と文化』1「所収拙稿「不退堂聖純とサダ女伝聞」では、文政十二・三年における小倉家の事情について、不退堂に起因する何等かの事件と想定しましたが、問題は、シーボルト事件だったようで、修正したいと思えます。なお、関連して、いくつかの措(仮)定について、修正・調整したいと思います。

文政九年(一八二六)

三月十九日(旧二月二日)・・・夜宮廷の高位の人物がわれわれヨーロッパ人を見に来る。けれどもお忍びである。この人は小倉中納言 Okura Tsunagono といつて、五十五歳で、息子と娘を連れてみえた。使節が出迎える。彼は婦人のように歯を染めていた。これは帝の宮廷における貴族の風習である。

「東洋文庫」『江戸参府紀行』

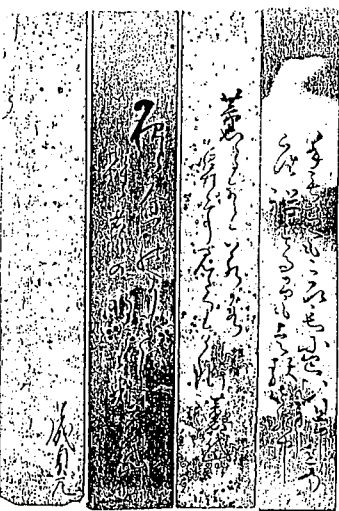
シーボルト著 齊藤信訳 一五八〜一五九頁

齊藤 信氏は「註」(三頁下段)で、また呉 秀三氏も『シーボルト先生とその生涯及び功業』(東洋文庫)「所収「シーボルト先生江戸参府日記抜粋」の割註で、小

倉中納言を当時四十六歳の小倉豊季に、子息に随季、息女に吉姫を当てております。(二六〜二七頁)

私は、シーボルトが会ったのは、この時二十五歳の小倉中納言随季と、彼の妻の房姫二十歳、そして随季夫妻の子輔季の「為実子」縁組みの親である、五十六歳の甘露寺国長の三人であると思えます。この理由は第一に、シーボルトは会った相手の年齢を十歳も見まちがえるような人物ではないこと、第二に、豊季は文政七年に権中納言を辞任、当時隠退しており、随季が現役だったこと、第三に、「小倉中納言です」と紹介された場合、一番年輩者であり恰幅のよい国長を、「小倉中納言」と誤解することはありうるからです。第四に、後述する小倉家の不幸の皮切りに随季妻の死があるからです。第五に、文政九年当時「吉姫」は十二歳でした。まだ幼さの残っている公卿の姫に、シーボルトが関心を寄せない、日記に記録しないということはないでしょう。彼は、帰路の京都滞在の六月二日から五日(旧四月二十七日から三十日)

には、小森肥後介(四十五歳)の娘(二十歳前後か)のこと、商家の娘のことを記しているのですから。まして「われわれヨーロッパ人を見に来る」と、訪問者の目的は明記しております。幼さもまだ残っている十二歳の姫の関心に、シーボルトの方も興味を示しても、おかしくありません。次の「3 子女達の海外関心」参照)また傷病の治療ということならば、肥後介との関係が記されてもよいでしょう。(そこには第六の問題として、あまり記録したくない、あるいは記録を「はばかりたい話題」



だったので記録を控えさせた、ということではなかったのかという疑問があります。つまり、そういう性格の訪問だった、はじめから仮構をほどこした忍びの訪問だった、事件発覚後は特に、更に仮構を重ねなければならなかった、ということでしょうか。

(一九七頁 東洋文庫二〇三)と記載されている小森(従六位下)等がどうなったかについても、同掲書の注(三九頁)以上には判りませんが、「晩年には皇女欽宮の診療を命ぜられた。従五位下 信濃守」とありますから、彼等に對しては程ほどだったのでしょうか。

シーボルトは、文政十一年(一八二八)十二月には幽閉され、ここに至るまでに家宅捜査・尋問が重ねられ、翌十二年三月には所持品押収と事態が進展しております。シーボルトの日記も調べられたことでしょうか。そして「日記」にはシーボルトとあった公卿は、小倉中納言久子しか載っていないのです。時の京都所司代は水野越前です。先述の六月二日(旧四月二十七日)「帝室の侍医小森肥後介・新宮涼庭 Riozun・将監 Siogen 等来訪す。余はこの機会を利用して、京都及び禁裡の報告を蒐集せり。」

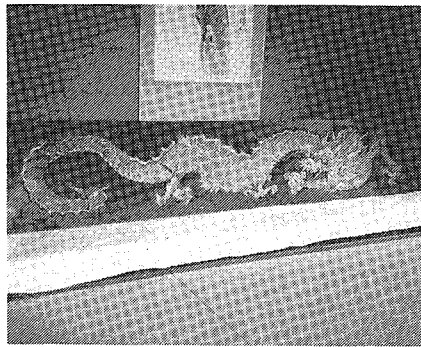
物置より龍が出た

川瀬速雄

私は、箱根塔ノ沢環翠楼の従業員です。

過日専務に命じられて物置の中を整理した。何十年も放置してあり、手の付けられない程の乱雑である。片隅の古道具、古家具をどけて敷板を見ると、何やら墨書きしてある。ほこりを拂い、裏返しして驚いた。黒漆塗りした地板に一刀彫で見事な一匹の龍が彫ってあり、金箔が施してある。杉材と思われる四種の厚板で、長さ一米三十七糎、巾四十二糎、表面下方に、「七十八翁貞源作印」の銘があり、

王譽妙龍
十方恒沙證諸佛
觀世音菩薩
南無阿彌陀佛
祐口全「花押」
大勢至菩薩
佛法護持諸天□神
龍譽高轉
安永三甲午天
六月二日成就
神田住人
俣譽貞源



王譽妙龍

と、墨書してありました。環翠楼は、塔ノ沢温泉で、「元湯」と云われており、当館所蔵の古文書(明治二十四年十一月 風祭宝泉寺住職 朝木賢峯)塔ノ沢元湯来歴によると、大閣秀吉公の臣に、生国姫路で、秋山秀三郎という人がおり、四

「吉姫」の安全を確認した後死んだものと思われま

3 子女達の海外関心

『東洋文庫 八七』より抜粋

六月二日(旧四月二十七日) ふたりのたいへんきれいな婦人がわれわれを訪ねてきた。ひとりとは商人の娘で、もうひとりとは肥後介の娘である。身分の高い未婚の婦人は長い袖の着物を着ていて、物腰がたいそう優美で、女らしい教養をもち、たいへん可愛らしく着飾り、少し気取って、ヨーロッパの娘と同じように恥ずかしそうにして姿をみせる。書道・音楽・和歌のたしなみが彼女たちの学問的教養となり、なかには漢字のできるものもある。

(八三頁)

六月五日(旧四月三十日) 夜、友人肥後介およびその親戚な家族とともに過ぐす。若い婦人たちは、これまでも述べたとおり、高い教養があるので、この人たちとはヨーロッパの流儀で本当に楽しく歓談することができ。

(同 三三頁)

五月三日(旧三月二十七日) われわれは將軍の侍医・諸侯の家臣らの訪問をうけた。彼らの妻や娘たちも妨げられずにはいることを許され、いつも可愛らしい手作りの、小さい贈物などを持ってきたくれた。

(同 二七頁)

大奥の関心(同 二〇三頁)もさることながら、シーボルト等に接した子女たちの態度は、憶せず、こだわりなく、まったく平常心で、見事な国際性を示しています。単なる物珍しきで接待しているとは思えません。シーボルトや海外についての、かなりの知識に裏づけされての、態度と思われま

(統)

国、九州平定、小田原攻めに参陣等、常に大閣殿下の側近くに仕えておりましたが、天正十八年(一五九〇)病にかゝりお暇を給わった。永年の功により永三貫文及び塔ノ峯の地を給わり、ここに閑居した。天正十九年秋、竹杖を持って歩行峯辺の湯煙の気のある地に居宅を移した。

文禄元年(一五九二)春、山麓を崩したところ、熱湯噴出したのでこの近くに小屋を造りて湯場としたところ病いが癒えたので、湯場を村人に開放した。忽たちまち、名湯の名は広まり、湯治場となった。人々この湯を元湯と稱した。秀三郎法名を道秀と云い、子孫は代々弥五兵衛と名乗り、塔ノ沢温泉の頭取を務めておりましたが、明治の初め、中田暢平が引継ぎ、元湯中田(別名、真仙台)と稱していた。皇女和宮様が明治十年八月七日より、病氣静養に来館せられ、九月一日、三十二歳で御逝去されたのは、この真仙台であります。

明治十七年(一八八六)小田原の鈴木善左衛門が引継ぎ、旅館を建て替え、元湯鈴木と稱していたが、明治二十二年、伊藤博文公が知人の勧めで来泊、忽、館主善左衛門と肝胆相照らす仲となり、明治二十九年、大日本帝国憲法草案脱稿まで、別荘がわりに宿泊し、一詩。

勝麗山下翠雲閣
環翠楼頭翠色開
來倚翠欄巨呼酒
翠鬱影落掌中杯

と賦し、環翠楼と命名した。表題の龍は、安永三年(一七五四)の成就と云う彫刻なので、秋山家―中田家、時代即ち明治十七年の建て替え以前の旅館の棟飾り、守護神と思われる。

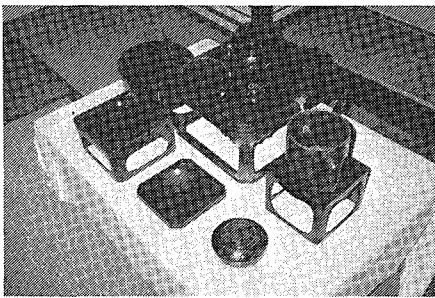
また、龍神と共に、武者を彫った欄間、唐獅子、傘と波の破風等の彫刻品と、皇女和宮様のご遺品と思われる、葵紋入りの「たかつき」、杯はち、その他見事な塗りの用度品も出て来ました。

しかし、明治十七年の建て替え、大正八年の増改築、昭和五年のはなれ新築に伴う物置の移転等で、貴重な彫刻品、用度品の大部分が散失し、残存わずかなのは、惜まれる。

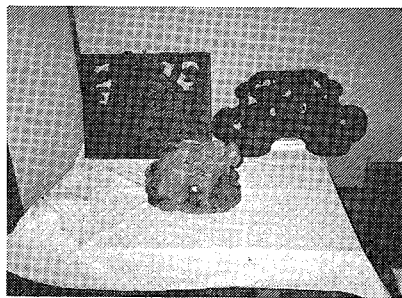
環翠楼では、この彫刻龍神を清淨し、御祈祷し、安置して当館の守護神に祭ることになりました。

まだ物置の整理は完了していません。今後何が出て来るか楽しみです。取りあえず中間の報告といたします。

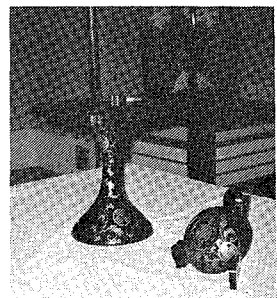
(平成元年八月記)



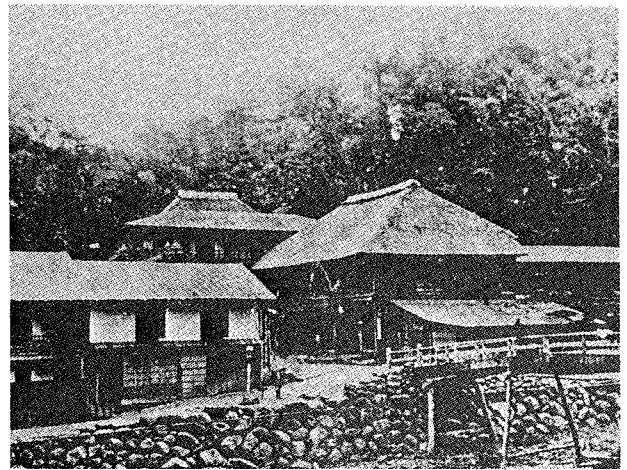
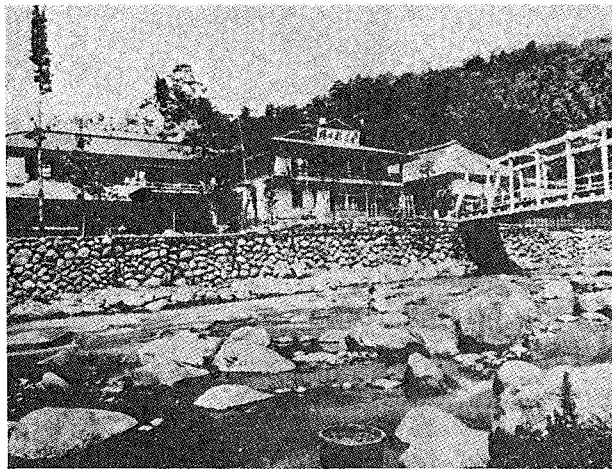
繕用度品の一部



唐獅子その他の彫刻品



葵紋入り「たかつき」と杯



塔の沢温泉と鈴木楼 右の写真から見ると玉の緒橋がだいぶ立派になっている。元湯に鈴木楼という看板が掲げられているのは、明治十七年小田原の鈴木善左衛門が中田暢平から買いつけて以降のこと、それを環翠楼に改めたのは明治二十三年頃で、写真は明治二十年頃の撮影と思われる。

塔の沢温泉の元湯と一の湯 明治十年前後の塔の沢で、当時塔の沢の温泉旅館は6軒あったが、元湯(左)と一の湯(右)とが知られていた。元湯は徳川14代將軍家茂夫人和宮が静養なさったときの形を残しており、和宮は、中央の奥の建物「真仙台」で亡くなられた。

明治
『写真集 大正 小田原・箱根』より
昭和

相州上曾我村瑞雲寺 開基爭論記(四)

西山 銈太郎

差上申一札之事

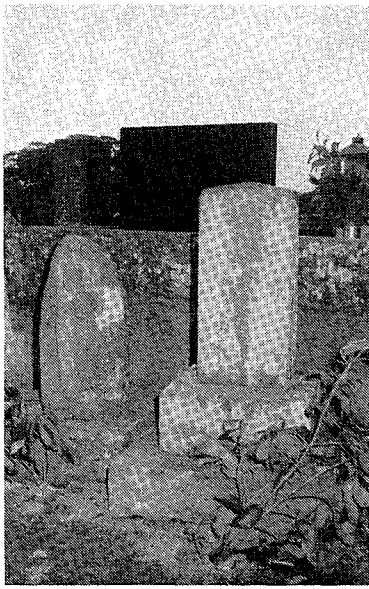
小普請組小笠原勝三郎様御組本
多八三郎殿先祖位牌ヲ相州上曾
我村瑞雲寺寛高削取候一件引合
之者共をも被召出再應御吟味之
上左之通被仰渡候

二候ハ、法名削取呉候様右兩人
申間候を其儘差置候而者再建之
差障ニ可相成与致候逆右位牌法
名削取候始末法中の身分ニ有之
間鋪儀不届ニ付退院被
仰付候

一 瑞雲寺寛高儀同寺燒失後再
建ニ付村内檀家又左衛門外壹人
中ニ任セ寛左衛門之先祖開基之
儀故多分之寄進をいたし可然様
一旦申談又者同先祖祖龍珠宗洞
石碑与申傳候無名之五輪之石碑
并開基与認候位牌をも新古過古
帳取調之上不都合之次第有之候
逆右石碑位牌等も追而附会いた
し候哉ニ被相察不候杯又左衛門
外壹人ニ申間候故全虚靈之位牌

一 又左衛門銀右衛門岩右衛門
幸藏源兵衛半右衛門常右衛門廣
七豊治多兵衛弥五右衛門仁左衛
門浅蔵与兵衛公右衛門儀村内瑞
雲寺燒失後再建ニ付寛左衛門者
同寺開基之由ニ候上者多分之寄
進致可然与同人江申談候様住持
寛高江相咄又者又左衛門先祖龍
珠宗洞石碑之由申傳候無名之五
輪之石碑者曾我岸村文次郎先祖
厄介人花庭宗栄石碑之由申間候

本多家墓地 寛高供養塔



者茂有之寛左衛門方開基之儀
も信用難成杯不取留儀ヲ以取調
之義寛高江申談候処新古過古帳
之趣不都合之次第茂有之石碑位
牌共追而致候哉ニ被相察候由同
人申間候逆右体不分明之石碑ニ
而位牌義茂新古過去帳ニ不引合
上者全虚靈ニ付法名削取呉候様
申談候故寛高儀位牌法名削取候
次第ニ相成候始末ハ又左衛門銀
右衛門者重立取計候段別而之義
一同不埒ニ付又左衛門銀右衛門
過料五貫文宛被 仰付岩右衛門
外拾貳人者御呵被置候

高削取候位牌者如元形八三郎寛
左衛門方ニ而申合取繕瑞雲寺江
相納候共且家之者共差障申間敷
旨被 仰渡候

右被 仰渡候趣一同承知奉畏候
且過料儀者三日之内当御奉行所
江可相納旨被 仰渡是又承知奉
畏候者相背候ハ、重科可被 仰
付候仍御請証文差上申処如件
文政十二年七月廿三日
大久保加賀守領分
相州足柄上郡上曾我村
曹洞宗瑞雲寺
寛高 ㊦

同村百姓 寛左衛門 ㊦
右瑞雲寺檀家
百姓 又左衛門
銀右衛門
岩右衛門
幸 蔵
源兵衛
廣七
豊作
多兵衛
半右衛門
岸右衛門

同郡曾我岸村
百姓 弥五右衛門
仁左衛門
浅 蔵
谷津村
百姓 与兵衛
公右衛門
大惣代 又左衛門 ㊦
半右衛門 ㊦

三本松切り株

村役人惣代組頭 仙七 ㊦
御朱印地 同國津久井郡根小屋村
曹洞宗功雲寺 泰船代役僧
同國足柄下郡曾我岸村 文次郎代 半十郎 ㊦
村役人惣代組頭 仁左衛門 ㊦
小日向総寧寺役僧 宗 楷 ㊦
神社 御奉行所 前書被 仰渡候趣拙僧儀
も罷出奉承知候依て奥書
印形差上申候 觸頭 大中寺 ㊦
御請書 私先祖位牌を相州上曾我村瑞雲



寺寛高削取候一件ニ付被 仰出
再應御吟味之上私義不埒之筋無
之御構無之今般申争候石碑者寛
左衛門方ニ而進退致寛高削取候
位牌者如元形私并寛左衛門方ニ
而申合取繕瑞雲寺江相納候与茂
担中之もの差障申間鋪旨被 仰
渡奉承知候仍御請如件

文政十二年七月廿三日

小普請組小笠原勝三郎組

本多八三郎 ㊦

寺社

御奉行所

御届 本多八三郎

私儀今廿三日寺社奉行松平伊豆
守宅江御呼出ニ罷出候処去子年
中奉願私先祖位牌ヲ相州上菅我
村瑞雲寺寛高削取候一件落着ニ
付別紙之通被申渡右請書調印仕
先達而差出置候位牌并古書物壹
通請取申候依て此致御届申上候
以上

丑七月廿三日 本多八三郎

寛 本多八三郎

司道人杉山藤五郎

右之者江差添今廿三日寺社奉行
松平伊豆守宅江罷出候処八三郎
御届申上候通同人相願渡一并被
申渡相濟其旨勝三郎殿江可申上
旨伊豆守被申渡候依て此段申上
候以上

丑七月廿三日 久嶋岩次郎

三拾九枚之内

墨付三拾五枚

結末

以上「相州上菅我村瑞雲寺開
基争論記」(以下「開基争論記」
と署名す)の如く、文政十二年
(二六二)七月二十三日、寺社奉
行所での判決は、原告本多八三
郎側の勝訴、被告寛高側の全面
敗北で終わった。退院の判決があっ
た寛高は、一度は瑞雲寺に帰り

(追放と異なり、退院は一度は
寺に帰る事が許された)やがて
編笠一つで山門前の瑞雲寺の象
徴と云はれた三本松(何れも大
人が三人で抱える程の松が、三
本寄り添う様に生えていたが、
借しくも十数年前松喰虫にやら
れて切ってしまった)の下で、
寺を振り返って「残念だ、見て
居れよ」と云い残して、何処と
もなく流浪の旅に出た。瑞雲寺
の過去帳には寛高は瑞雲寺の世
代には残っていない。

記録と伝承に残る事件は以上
の通りであるが、此の裁判には
疑問の持たれる節がある。
曾我幸泊木温氏方に伝はる古
文書に「龍珠山瑞雲寺開闢由
来之事
相模國足柄上郡と同下郡の境
大槻と申す古木有り此本二堂
一字但シ本尊十一面觀世音菩
薩也何時建立と云事年代曖と
不相智レ明應三壬子年(翌)
仁忠繼儀和尚禪師(瑞雲寺の
本寺津久井の功雲寺住職)ヲ
為開山と龍珠山瑞雲寺と致改

号者也此時同國足柄下郡小田
原城主大森筑前守知行所
明應元壬子年
上菅我村下道
柏木又太郎

とあり、瑞雲寺過去帳には「開
基龍珠宗洞居士 相州黒岩城主
天正十五亥(五七) 四月二日
当村当久保本多」とある。火災
で焼けたから火災後に作られた
現過去帳の記録である。
これが正しいとすると、瑞雲
寺の開基と云う本多豊前守信親
は九十五歳で死んだとすれば、
瑞雲寺開山当時は零歳だった事
になる。今日でも百歳以上と云
うと珍らしいのに、当時の人の
寿命を考えると一寸疑念が持た
れる。

事件の発端は、文政八年瑞雲寺
は焼失し、再建の為に募金をす
る事にあつた。寛左衛門に「日
頃は俺の処は開基の開基だ」と云
てる、寄附金は沢山出して呉れ
」と云つたのに、寛左衛門は「そ
んなには出せない」と云う処に
原因がある様だ。

幕府の公文書「開基
争論記」には「瑞雲院」
なる文字があるが、瑞
雲寺に現存する過去帳
にも、立牌堂に納られ
た本多家の位牌にも
「瑞雲院」なる法号は何
処にも出て来ない。本
多家の位牌には正面に

「開基龍珠宗洞居士」裏に、
「相州上菅我郷龍珠山瑞雲寺開
基本多豊前守牌」これを納めた
厨子の扉を開けると、右扉の裏
に「七代日本多八三郎親賢納之」
左扉には「文政十三庚寅年三月」
とある。文政十三年では事件後
に作られたと思はれる。

これと関連があるのであろう、
瑞雲寺先住即ち二十一世龍跳和
尚の故夫人から「檀家から戒名
を決めて来るものではない。戒
名と云うものは寺でつけるもの
である」との寺に残る伝承を聞
いた。

文化・文政と云えば町民文化
爛熟の時代と云はれる反面、貨
幣経済の実権は町民に握られ、
武士階級は苦境に陥り、大名以
下武士は商人から借金をして頭
が上がらない。幕府とても苦し
いのは同じだ。それに加えて諸
外国からは開國を迫られ、更に
は漸く勤王の声も高くなり、文
字通り内憂外患幕府は己自身の
保身策に汲汲としてた。此の年
即ち文政十二年から三十八年後



萬靈塔



の慶應三年(二六六)には、王政
復古の号令が発せられ、その
翌年江戸は無血開城して、幕府
は完全につぶれてしまった。
幕府は威厳を保つ上からも、
その直参の旗本が、田舎の百姓
共の檀家百戸に足りない寺と喧
嘩をして、負ける訳にはいか
なかつたのではないか。寛高は
喧嘩をするには相手が悪かつた。
寛左衛門は俺の家は開基だと
日常の動作も大きかつた。他方
檀家の中では豪農・旧家と云は
れる者も多く、互いに俺が俺が
と云ってる者もあつた。寛左衛
門を含めて平常は静かに見えて
も、寺再建が導火線となり、若
い積極的な寛高和尚を中にして
張り合う結果となつたのではな
いか。
此の事件とは関係ないだろう
が、本多家では余りにも不幸が
壇徒會館と洗心亭

続くと云うので、寛高和尚の冥福を祈って供養を行った。今本多家の墓地には、

明治三十一年
追善觀光大和尚尊位
十一月二十三日

と石碑が建っている。

後日談

事実は小説よりも奇なりの後日談がある。瑞雲寺の住職は現在重忠師である。先住龍跳師を父として生れ、戦争中駒沢大学に学んだが、群馬県出身の学友と勉学に勤しんだ。そして軍隊、やがて終戦となった。父龍跳遷化後二十二世を継ぎ、世話する人があって夫人を迎えた。偶然にもかつての学友の妹だった。が、こゝ迄は珍しいと云えば珍しい事だが先づはありきたりの

話である。

時日の経過と共に徐々に夫人の語る処に依ると、その群馬県の実家の寺には、昔、流浪の旅を続けて来た和尚が入った。その和尚は相模の方に居た事があり、その群馬県高崎の実家の寺は元は他宗だったのを、その和尚が曹洞宗に改宗したそうだが、何でも相当な手腕家だったらしい。瑞雲寺でも昔前記事件の結果、流浪の旅に出た和尚があり、上州の方に落ちついたらしいと風の便りに聞いていたので、なおもよく双方の話を総合した結果、寛高和尚である事が判明した。寛高は各地を流浪の後、安住の地を上州高崎に求めたのだった。此の話を聞いた本多家一統では「寛高和尚が姿を替えて瑞雲寺へお帰りになった」と大いに喜んだ。

川柳

高井喜雄

通知表親は昔を棚に上げ
子の部屋に彼女来ていてみな静か
さりげなく茶柱のある方をとり
楽隠居昔はあった言葉だが
見舞かと思えば入信すすめられ

終りに

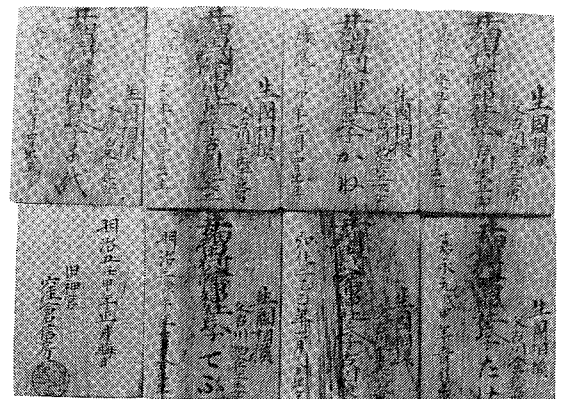
瑞雲寺では庫裡壇徒会館等を建設し、昭和五十三年三月一日落慶式を挙行した。これを機会に檀家の方々に、菩提寺の由来を知って頂くべく私は「瑞雲寺のしおり」を書き、多くの来賓並びに檀家一般に配布した。その調査中「開基論記」なる記録のある事を知った。「はじめに」に記した如く、此の話は子供の頃から何回も聞いてたので興味をもった。

私の祖父は母の実家へ養子に來たのでその祖父の源蔵から愛され、事件当時二十歳台で物識りだった源蔵から、よく昔話等を聞かされた。従って私は此の祖父倉次郎の話には信がおけると思ってきた。

瑞雲寺の建設関係の残務整理も大方終り、国立公文書館で『開基論記』全文のコピーを得て読み始めた。私は古文書は始めてだったので読めない。七十歳近いへそ曲りの私は八ようし、誰にも聞かないできつと一人で読んでやるぞ!と思った。

氏子調

明治政府は、祭政一致仏教抑圧政策のため明治四年(二七)七月太政官布告で「大小神社氏子取調」を命じた。この達しで、氏子は、生国・姓名・住所・生年月日と父の名を戸長に届け、戸長から神社への達しで氏子札が渡されることになった。しかし、この制度は明治六年に廃止された。



(小田原市扇町二丁目古川惣平氏所蔵)

その他精神的苦勞も莫大なるものであった事を伝えているが、今回は表面に出た公文書のみで當時を振り返ってみた。
なお國府台総寧寺・三田大久寺・高崎永福寺等へ足を運ばなければ、歴史を語る資格はないが他日に譲る事とした。

使用した辞典

- 『くづし字解説辞典』
- 『近世古文書解説辞典』
- 『書体字典』『草書字典』

(おわり)

本稿を草するにあたり、国立公文書館・小田原市立図書館・瑞雲寺大井住職夫妻・書家樋口昌香・『小田原史談』編集委員岡部忠夫・同高田善久三・同和田登の各氏に多くの御教示御指導を頂き、特に岡部委員長には校正の段階に於ても、大変御厄

穂坂志明氏(曾我別所八〇八本会々員) 昨年十月十六日逝去されました。
立花昌徳氏(本町二一九一四運正寺住職 本会々員) 昨年十一月二十六日逝去されました。御冥福をお祈りします。

酒匂神社の

ルーツについて

川瀬 春雄

酒匂町の西の端のバス停「酒匂中学校」を北へ昔から横町(よこちょう)と呼ばれてきた二百メートル程の直線道路の突当りに、この町の鎮守、酒匂神社がある。

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現



境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

境内は五千平方メートルもあるうか、社殿の裏手には二抱以上もある楠の大木が五、六本、松、銀杏等の古木が生い茂っている。現

なお、神社については、近隣の古老の話を総合すると、明治初年、神佛分離令が出されて日本中騒然とした頃であろう、昔から駒形権現神社と呼んできたこの神社を酒匂神社と改稱し、同時に村内に散らしていた金山社、諏訪社、十二天社、山王社等が集められて酒匂神社の境内に合祀されたと言う事である。この様に、多くの神々を集めたので「寄せ宮(よせみや)」と呼んだとも言事であった。

しかし、今はこれ等の神々の姿は一つも見事な事はできない。唯一つ、朽ちかけた小さな社がトタン板に覆われているが、これは八幡社と呼んで、昔から酒匂神社の西側の道路を距てた松林の中に祀られていたのを、大正の初年になってここに

このことについて、神社近くの古老は次の様に語ってくれた。「大昔この所(神社の西側の道路を距てた松林)で渡来人の婦人が機織をしていたとの伝説がある。「七夕さん」の名もそこから起きたものであろう。との事であった。「七夕さん」の呼名も今では忘れ去られて知る人もなくなつたが、渡来人伝説のあった事だけは残しておきたいものである。

幕末天保十年頃(明治に変わる三十年程前)に徳川幕府によって編纂された地誌に、『新編相模風土記稿』という本がある。この中の足柄下郡酒匂村の項をみると駒形社とあり、次の様に記されている。これがのちの酒匂神社である。

駒形社、村の鎮守なり。祭神うがやぶきあえず尊(木立像長二尺)又当社の生題と(按ずるに正体の誤りなるべし)號して銅鏡面に像を鑄出せしものを別当寺に置。天文二十二年、酒匂郷代官岡部出雲守廣定の寄付する所なり。帖(中略)：「北條俊上野国(群馬県)平井城に攻め、これを越後に追ひ、関東全域を制覇した小田原北條氏の最盛期とも言える当社事なり。本地十

一面観音(別当寺の本尊是なり)例祭は七月七日(当社及八幡の神輿を昇て村中を巡行す)元和七年領主安部備中守正次先規に任せ供免五石を寄付す(徳工門家乘に寄付状の案あり、曰く相州西郡酒匂郷駒形権現社領之事田畑五石地也、但御供免、御祭免、御造家免右之分如前々之相違有間舖者也、元和七年十月安部備中守内、内藤寛右工門印下官理工門印 小島主水へ参とあり)今も社地の外供免五石六斗余の除地を付す幣殿、拜殿等あり、寛永五年の罅口を掲ぐ社地に供所及び神木古松一株あり(囲一丈八尺)南蔵寺持

文中にある酒匂郷代官岡部出雲守廣定なる北條氏家臣が奉納した銅鏡の天文二十二年(一五五三)の銘のあった事は、即ち、四百三十五年前に駒形社が存在した事を示している。

天文二十二年と言えは北條氏三代氏康が上杉憲政を攻め、これを越後に追ひ、関東全域を制覇した小田原北條氏の最盛期とも言える当社事なり。本地十

又ここに出てくる北條俊帖とは『小田原系所領俊帖』と稱し、北條氏一族の家臣の所領の明細を記したものである。文中「幻庵内室の知行駒形分と見ゆ則当社事なり」とあるが駒形分とは駒形社の周辺の一区域の地名であつて神社そのものではない。徳川時代になつて、元和七年小田原藩主安部備中守正次より寄付奉納を受けたと言つてから考へて、廣く信仰尊敬されてきた事が窺える。末尾に南蔵寺持とあるこの寺が駒形社を管理していた別当寺であつた。

九郎(後の北條早雲)が大森氏を小田原から追い出したのはその三十年後(明應四年)であり、二年後には京都で應仁の乱が始まっている。

駒形社と福田寺(現在の南蔵寺)との関係について前記の大森氏時代以前の駒形社を考える時、別当寺であったこの福田寺との関係を考えてみなければならぬであろう。(別当寺とは神官のいない神社を僧侶(寺)がこれを管理していた。これは極一般的なことであった)この寺は現在酒匂町の裏通りに上蔵寺と隣合って存在している。

『相模風土記』によると、南蔵寺 酒匂山(中古龍光山と改めし事あり。こは萬治三年六月仁和寺門主当寺へ寄興あり其頃境内北隅に龍燈出現の古松ありしを以て令旨を賜れり後天明二年の回祿に令旨鳥有となり又龍燈の松も枯稿せしかば鑄號に復せしと云う)不動院と號す。古義真言宗(国府津村宝金剛寺末)寺伝に古は福田寺と號し寺地も今の所在より四、五町隔ててあり(村内不動免と呼ぶ水田是なり今も当寺の持にて租地なり)今の寺號に改めし

年代(詳ならず)建久の初め鶴岡海光院(供僧十二院の一)の開山義慶(武蔵阿蘭梨と號す)当寺へ隱棲す。義慶は頼朝卿の偏依僧なりしかば同年八月御台所平座の祈禱を命ぜらる(東鑑曰く八月九日御台所後産氣鶴岡神社佛寺奉神馬被修誦經福田寺酒匂。按ずるに佛閣十五寺の一なり)本尊十一面觀音(木立像二尺四寸、本地駒形八幡両社の本地佛なり)と記されている。この末尾の本尊十一面觀音は村内駒形、八幡両社の本地佛なりとあるは即ち別当寺であった事を言っている。福田寺から南蔵寺と改稱したこの寺が駒形社の別当寺としての関係が何時頃の時代になってきたのか明瞭ではないが、それはおそらくまだこの酒匂に福田寺だけで他に寺がなかった頃のことであった可能性は大きいと筆者は考えている。

軍来襲の年)とあり、又大銀杏と二メートル近い五輪塔三基のある上輩寺の起立は、永仁五年(三三三)である『相模風土記』の中に記されている。これら記事からみて、この年代あたり迄酒匂には福田寺の他に寺はなかった事がわかる。とすればこの寺が駒形社の別当寺となったのはこの年代(三三三)以前の事であろう事が考えられる。ところで今酒匂町の北隣に鴨宮の町があるが、古く頼朝の時代には柳下(やぎした)と呼んでいたと言いつ、その当時からここに加茂神社が祀られていた事が古書『東鑑』の中の頼朝夫人政子の平産祈願(二二五)をした相模の国十五方所の神社佛寺の中の酒匂福田寺と並んで柳下加茂と記されている事から知る事ができる。この神社がどの様な理由で祈願所の一つとして、寒川神社、川内神社、箱根神社等と同列に記されているのか何かそれなりの理由があった事であろうが、それはさたき筆者が注目したいのは、この柳下(後の鴨宮)は当時もおそらく酒匂村に比較して、戸敷も半分程の集落であり乍ら加茂神社の存在が実証されている事である。こうしたところから見て、この年代酒匂にも土

である駒形神社が祀られていたと考えても不自然な推理ではないであろう。酒匂の古い歴史として箱根権現文書の中にある「鳥羽太上皇就当州酒輪郷四十八丁以天旨令寄付云々」との記録のある既に周知の事である。鳥羽上皇が酒匂の地四十八丁を箱根権現の社領として寄進したと言うものである。この事によって酒匂郷民は権現と氏子と同様の結びつきができたのではなからうか。鳥羽上皇が院政を布いていた(二元く美)頃の事である(源頼朝鎌倉開府より五十数年以前)。ところで、この寄進事例は当時あってはあまり珍しくない事の様であった。驚いた事に隣接する高田郷、田島郷に於いて、筆者の推理そのままの事蹟があった事が『新編相模風土記稿』の中に記されているのである。足柄下郡高田村の條を見ると、

文同所内箱分庚辰檢地辻：「
ここで言う駒形分とは即ち酒匂駒形社(今の酒匂神社)の周辺の地域である。箱分(根)分とはどこであったかは、今はっきりとわからないが、おそらく酒匂郷の中央部に近い地域ではなかつたらうか。この二つの地名から考えられる事は、寄進によって神領となつた酒匂郷民の願望によって箱根権現の分靈をこの地に勧請し、酒匂駒形社として祀つたものではなかつたらうかと言ふ事である。だが、これは全くの推理である。ところがこの推理の様な事例は当時あってはあまり珍しくない事の様であった。驚いた事に隣接する高田郷、田島郷に於いて、筆者の推理そのままの事蹟があった事が『新編相模風土記稿』の中に記されているのである。足柄下郡高田村の條を見ると、

「寿永二年二月源頼朝郷鶴岡八幡宮社領に高田郷、田島郷の二郷を寄進せらる(鶴岡文書曰奉寄相模國鎌倉郡内鶴岡八幡宮新宮若宮御領事在本國一箇所高田郷、田島郷右爲神威増益爲所願成就所奉寄也。：前右兵衛佐源朝臣華押)」「若宮八幡は村の鎮守なり按ずるに古当村鶴岡八幡宮の社領た

りしを以つて土地神として祀りしなり」とある。この若宮八幡は今も高田に存在する。この高田郷の場合同様寄進の時点で酒匂にはまだ土地神なるものが存在しなかつた事が考えられる。最後にこの酒匂駒形社に関わる一つの伝承のあつた事も書き加えておかなければならないであろう。昭和四十七年頃であつたらうか、神社前の通りに住む一人の老嫗から直接次の様な話を聞いたものである。「この神社は箱根権現さんの弟宮であるとか昔から言われている」とわざわざこれだけの言葉であつたがこれだけの言葉では四百三十年前の酒匂郷四十八町寄進と結びつくものが感じられるのである。



平成元年五月十五日
住所 小田原市酒匂
二一三八一五六

戦争中、日本でも

短期間のうちにペニシリンが開発されていた

ペニシリンが第二次大戦中、イギリスで開発されたことは、広く知られているが、日本でも戦争中、製造されていたことを知っている人は少ない。

このことを知った角田房子さんは、科学のことは鼻違いに拘らず取組み、数多くの資料を調査し、また、日本で開発に当たった関係者四十余名に取材し、『碧素・日本ペニシリン物』(昭和五十三年新潮社刊)を著わされた。

以下、イギリスに於けるペニシリンの発見から、日本での開発・製造に至る迄の概略を、角田さんの本や、その他の資料によってお伝えしたい。

ペニシリンの発見は、一九二八年(昭和三年)、英国の細菌学者アレキサンダー・フレミング博士(当時四十七歳)の手になるもので、青かびの菌糸が刷毛状だったことから、刷毛の意味のあるラテン語ペニシリウムより採って、ペニシリンと名づけ、翌一九二九年、英国実験病理学

雑誌に発表した。

しかし、この研究成果は、その後、埋もれたまま過ぎてしまった。

日の目を見たのは、十年後の一九三九年(昭和十四年)第二次大戦が勃発してからのことである。戦いで傷ついた将兵の治

奥田晴子

療のため、危険な化膿菌を防ぐ新薬開発の必要性に迫られるようになった。

このとき、フレミングのペニシリンに目をつけたのは、オックスフォード大学病理学教授ハワード・ウォルター・フロリーであった。

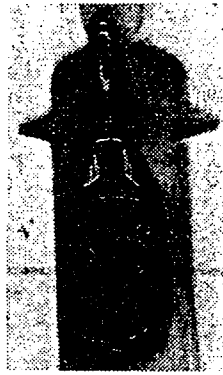
彼は、共同研究者として、エルンスト・チェインを加え、更にノーマン・ヒートレイを加え、それに各分野の科学者、技術者も参加することにより、ペニシリンの研究は一層活発となった。

しかし、一九四一年(昭和十六年)、ドイツのロケット兵器

によるイギリス本土の攻撃で、イギリスでの研究は難しくなり、アメリカに渡って――既にペニシリンは知られていた――生産方法の研究がなされ、成果を見るに至った。四二年の初め、イギリスでも僅かながら工業的生産を始めた。

なお、後のことになるが、フレミング、フロリー、チェインの三人は、戦争が終わった一九四五年(昭和二十年)十二月にノーベル医学賞を受賞している。

最古のペニシリンアンプルを展示中



1986.10.15



日本で最も早く製造されたペニシリンのアンプルの写真が、岐阜県川島町にある内藤記念くすり博物館(青木元夫館長)に展示されている。先週、新館の開館を機に行なった大規模展示替えの目玉の一つ。

このペニシリンは、一九四五(昭和二十年)森永薬品製。二〇〇。

日本のペニシリン早期開発

学際研究のおかげ

日本で一番古いペニシリンの常設展示(先月本欄)を機に、製造当時のことが、関係者の話題になっている。

第二次大戦中、英国でペニシリンが開発されたことは伝わっていたが、日本で本格的な研究が始まったのは「チャールズの肺炎が治った」(のちにペニシリンでなかったことが判明)と



彦氏(写真)が世話役で、特別な委員会が発足した。

現在、東京都内で開発する内科医の稲垣さしむ氏は「超スピードで開発できたのは、日本で初めてとされている学際研究の成果」と話す。梅沢浜夫氏

の新聞記事(一九四四年二月)から。五日後の二月一日、陸軍軍医学校教官の稲垣克

彦氏(写真)が世話役で、特別な委員会が発足した。現在、東京都内で開発する内科医の稲垣さしむ氏は「超スピードで開発できたのは、日本で初めてとされている学際研究の成果」と話す。梅沢浜夫氏で、十二年ぶりに三回になる。

この頃、ドイツにも、ペニシリンの情報にはスウェーデンから伝わっていた。

一九四三年(昭和十八年)後半になると、アメリカ・イギリス両国のペニシリン生産は大幅に軌道に乗った。四四年には、ソ連もアメリカ・イギリスの支援を得てペニシリンの研究に拍

は、共同研究者として、エルンスト・チェインを加え、更にノーマン・ヒートレイを加え、それに各分野の科学者、技術者も参加することにより、ペニシリンの研究は一層活発となった。

(現・微生物化学研究所長)をはじめ、医、農、薬、理学者などが集まった。奥貫一男・阪大名誉教授を中心は「分野の違う同年代の者同士の議論は本当に活気があったなあ」。一九四四年九月に試作品ができ、十一月には工場生産となった。

内藤記念くすり博物館(岐阜・川島町)に常設展示中のアンプルは森永薬品製。「不眠不休で翌年三月まで三万本弱生産したはず。以後粉末に変わりました」と、森永の三島工場製造課長だった大橋保さん(右)。

日本抗生物質学術協議会(東京)の八木沢守正・書記長によると、このアンプルは、戦後、学・官・民の協力で設立された同協議会の所有。四八年、協議会主催の「ペニシリン総合展」に出品された後は大切に保管され、七年(一九五二)抗生物質関係資料として、くすり博物館に寄託された。同博物館の特展(七三、四年)以来の公開

車がかけられた。

日本には、昭和十六年十二月二十一日、ドイツの潜水艦によって医学雑誌『臨床週報』が届けられ、その中にベルリン大学薬理学教室マンフレッド・キーゼ博士の英米のペニシリンについての研究をまとめた論文があった。

日本にとっても戦傷者の手当てに最も適した必要な新薬であると、陸軍軍医学校が主体となり、優秀な科学者、博士たちのグループにより、ペニシリンの研究、実験が急速に進められた。

ペニシリンの開発は、戦力化に大いに役立つもので、一刻も急を要することだった。

昭和十九年二月初め、ドイツにペニシリンの菌株と研究資料の送付の依頼を出した。それを受取ったのは、十月末のことであるが、菌株は既に死滅して

蓮乗寺の仏像を拝観して

去る九月に、史談会の皆様と共に、小台の浄土宗・蓮乗寺の聖子身観世音菩薩像を拝観させて頂きました。京都在住の現代の佛像彫刻界の第一人者、松久宗琳氏の作で、等身大の松の木彫りの観音像で、慈母のような温顔、ふくよかな体の線、腕、手、指の造形、せん細な彫りで、観音像が見事に人間的に形象化されていた。拜し見る人々に、美的感動を、又信仰に生きる方々

に、少しでも国民に朗報をと、ペニシリンの開発が短期間に成功した、という記事が、十九年十一月十七日の各紙に報導されました。それにしても、日本の一角でペニシリン製造した私たち勤労動員学徒が、奇しくもペニシリン誕生と同じ昭和三、四年生れであるとは、何か嬉し

丹沢の植物 ②

城川四郎

日本列島本州の中央部には糸魚川―静岡線という構造線があり、大山噴出して隆起し裸地の状態の時期もあったという。その裸地に浸入した植物たちは顕著な遺伝的変異をおこして新しい種類の植物に分化したものが多

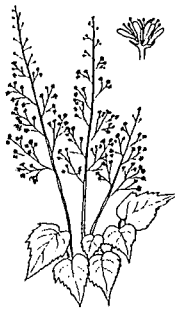
く、いとおしさを感じるのである。(编者付記) 奥田さんが、戦争中学徒動員で、森永食品三島工場のペニシリン製造部門で働いた経歴を記された、「戦争下女生生だった私」(『小田原史談』一三六号に収録)の原稿をいただいたとき、まさか、戦争中日本でペニシリンを製造していたとは、考へもしなかった

ので、へえ、そうだったのか、と思わずつぶやいた次第で、また、ペニシリンは敵性語で使われなかったのではないかと、疑問を持ったもので、奥田さんに問い合わせたところ、「追記」の形で、それに答えて下さった訳で、すぐさま、掲載すべきところ、紙面の都合でのびのびになったことをお詫びします。誰しもロマンチストになるに違いない。同じようにフォッサマグナ要素の植物で丹沢に多産するものにヒトツバシヨウマがある。箱根、愛鷹山にも分布するが、丹沢がもっとも多い。初夏に白い花穂を立てる様子はシヨウマの仲間であることをうなずかせるが、単葉であることはこの仲間として風変わりである。滝道の両側に着生して涼しげに滝のしぶきを浴びている姿は詩情がある。(神奈川県立博物館嘱託 元県立高校長)

イワシャジン (ききょう科) Adenophora takedai Makino



ヒトツバシヨウマ (ゆきのした科) Astilbe simplicifolia Makino



(筆者原図)

北村透谷と交友のあった 紅蓮洞・坂本易徳 ③

挫折の人生

岡部 忠 夫

坂本易徳は、北村透谷と同じ
小学校に通った。

「学齢に達した頃は、最早一
家は郷里(小田原)に引き移
った後のことでしたから、そ
この小学校に入学致しました。
その小学校に北村氏も入学致
したのですが、その頃はまだ
神童とか何とかいわれるよう
な事はなかったのです。平凡
な生徒であつたのです」

(『明星』明治二十九年十号)

透谷研究家勝本清一郎氏の
『北村透谷全集』の年譜による
と、

「一八七五年(明治八年)六
歳の年小田原で小学下等八
級に入学か。学校が順次分割
増設された事情により、本源
寺学校、緑学校、啓蒙学校等
に順に学んだ(一八七〇年六
月十六日・明治三年五月十八日
生れで透谷より一歳五カ月歳下
の従弟・石塚千之助直記)。一八
九二年四月十一日啓蒙学校と
幸学校が焼失した時に、透谷
は両校類焼義捐金に金二十銭
を醸出している。啓蒙学校が

透谷の母校の一つだったこと
は確実である(一八九二年五月
三十一日『函東会報告誌』第廿
四号)と。

本源寺学校は、明治六年(一八
七三)四月、本源寺を借りて開校
したための通称で、正式には啓
蒙館という。同八年九月になる
と、小学校の校名は、すべて地
名によるという訓令に基づき、

新玉学校と改称された。なお、
二カ月前の七月、小田原は、新
玉町・万年町・緑町・十字町と、
新しい地名の五つの地区に分け
られたが、あるいは小学校を改
称する機会に地名を変更した可
能性も考えられるが、しかし、
確証はない。

同十二年十二月、新玉学校は
廃止され、緑学校(明治十年幸
田口に新設に合併され、生徒は
緑学校に移ることになった。翌
十三年六月には、さらに緑、西
海子の両校が合併して、元の呼
称を用いた啓蒙学校に戻ること
になる。その所在は、幸一丁目
一八二番地(現本町二丁目九番あ

たり)。明治十年代になっても
続く、めぐるましい程の学校の
統廃合には手探り的な感じがし
ない訳でもない。結果論的には、
新しい近代の装いの形態に辿り
つく迄に通り返けなければなら
なかつた変換へのステップと言
えるかもしれない。あるいは、

司馬遼太郎氏の、明治維新には
青写真がなかつた、封建体制の
ぶち毀しの跡に建てる近代国家
の具体策を持たなかつた、と言
われる言葉は、狭い小田原の、
しかも教育という限られた分野
にも当てはまるのかもしれない。

小田原の小学校時代の透谷は
目立たない存在だった、と易徳
は言う。目立したのは、むしろ
透谷の実弟丸山垣穂の方で、年
齢の割に上級の学年にいたため、
その名が知れわたっていた。そ
れも、連続という制度のため、
学年末の大試験で一度に二級も
進級していたからであった。

なお彼は、明治六年(一八七三)
五月三十日の生れで、同十二年
の六歳のとき、丸山家を継ぎ、
日本画家として身を立て古香と
号した。作品は、あまり残って
いないが、高長寺(小田原市城
山二丁目十二番)に龍の襖絵が
残っている。昭和三年(一九一八)
八月十九日没。墓石は透谷と同
じ場所にある。

易徳が透谷と共に遊ぶように

なつた切っ掛けは、冬になると
易徳は霜焼になる癖があり、透
谷の祖父玄快が創製する「金明
膏」という膏薬を貰いに行くよ
うになつてからである。

この薬は、小田原地方では有
名で、「金明膏」と呼ぶよりは
北村の火傷の薬、玄快さんの膏
薬と呼ばれる程であつた、と言
う。

更に易徳が透谷と親しくなつ
たのは、通学していた小学校の
事務職員で、生徒等が「月謝の
先生」と呼んでいた磯田老人が
撃剣の教師を招いて開いていた
道場に、透谷と一緒に通うよう
になつてからである。

ついでに、
磯田老人というのは、旧小田
原藩士ではなかつたかとも思わ
れる。もっとも、これは私の速
断であるが……。

安政五年(一八五八)の小田原藩
『順席帳』に、「銀五枚 箱根御
關所仕番 磯田多仲政章 当三
三拾六歳」と、載っている。し
かし、裏付けするものは無く、た
だ、易徳が透谷と道場に通い始
めた、明治十一年(一八七六)の頃、
磯田老人は、五十五、六歳で、
子供達には、老人として映った
のも無理のない年齢ともいえる
からでもある。

そしてもし、私の勝手な推定
が許されるならば、

中村静夫氏作図の『城下町・

宿場町小田原』によると、道場

は、透谷の生家の筋向い、小田
原信用金庫本部の東隣りの浜町
一丁目十番あたりとなる。たゞ、
地図には、「磯田多仲百石」と
あるのに(これが正しいと思われ
るが)、『順席帳』が何故に「銀
五枚」としたのか明らかでない。
磯田老人が道場を開いたのは、
透谷と易徳が通い始めた、明治
十年頃かと思われるが、その六
年前の明治五年(一八七〇)六月に
は、次のような意味の武芸稽古
停止の通達が出されているのが
気になる。

「市中に於いて、武芸稽古を
することは、かねがね禁止し
ているのに拘らず、近頃、心
得違いの者がいて、剣術・柔
術・大弓などの稽古をしてい
る由と相聞く、もつて他の
ことである。武芸を稽古する
のは、家業の妨げになりまた、
思わぬ過失で、意外な事故が
発生し、たやすく習えるもの
ではない。

以後、右の如き心得違いが無
いように、精々、小前に至る
迄洩らさず申し諭すように
と、自分ども迄御沙汰があつ
たので、社寺は勿論のこと、
町内の小前に至る迄残らず、
町役人中への請印を取り置く
べきこと。

右承知の旨、町名下に請印の

上、至急願達留により相返すべきものである。

六月朔日 町年寄

(『明治小田原町誌』)

この触書は、維新政府の官報『太政官日誌』には載っていないのは勿論だが、『神奈川県資料』(第九巻附録部旧足柄東部)にもないところを見ると、神奈川県参事柏木忠俊の口達を、町年寄が記し、小田原の各町内に触れたものであろうか。文面からしても、そのように受けとることが出来る。

建物や境内が武芸稽古の格好の場となる社寺や、町内で細ぼそ生計を立てる小前に至る迄、請印をとれといった触書は、数多くは異例と思われるが、それだけに、廃藩置県という時代の大きな変り目の緊張感を伝えるものである。

この触書きが出された一年前の明治四年七月十四日(陽暦八月二十九日)には、小田原藩が廃止、小田原県が設置され、藩知事大久保忠良が退任している。ついであるが記すと、大久保忠良は、最後の小田原藩主で、華族に列せられたが、のち西南戦争に伍長で従軍、明治十年四月二十九日、熊本県山本郡平野村で戦死した。その達しがあったのは、半年あまり後の十一月十三日である。何如に疎略な扱いを受けていたかが知られる。

えるものであろう。この触書きが出された一年前の明治四年七月十四日(陽暦八月二十九日)には、小田原藩が廃止、小田原県が設置され、藩知事大久保忠良が退任している。ついであるが記すと、大久保忠良は、最後の小田原藩主で、華族に列せられたが、のち西南戦争に伍長で従軍、明治十年四月二十九日、熊本県山本郡平野村で戦死した。その達しがあったのは、半年あまり後の十一月十三日である。何如に疎略な扱いを受けていたかが知られる。

会報二七号に「明治三年六月十九日(陽暦五月二十七日)小田原県を設置。同年十一月十四日(陽暦十月二日)小田原を廃して足柄東設置」は、誤りにつき訂正いたします。柏木忠俊は、明治九年(公武)三月十八日、足柄東が廃止されると共に退職している。見方によつては、小田原藩解体後の処理役を勤めた、いふなれば、倒産した更生会社の管財人みたいな役であったが、小田原藩は、かつては朝敵藩という前歴のある藩である。その役に就く人は、武張っていないくても薩長出身というだけで旧藩土にアレルキが出たのではなからうか。柏木忠俊は伊豆の農民出身であるといつても、単なるそれではない。国防にも、農政にも力

をいれ、開明派として著名な、江川太郎左衛門の、元締手代として、少なくとも祖父の代から勤めた職で、民生に通じており、聡明でしかも素朴篤実な人柄であったといわれる。このような人物を足柄東の最高責任者に据えるとは、充分な配慮がなされた結果であろう。小田原藩では、明治三年(六五)十一月、新たに規則を制定し、まず、「定」に天朝ヨリ御布令ノ旨厚遵奉シ勤 王ノ道最可得心得事 一文武ノ業ヲ励ミ士操ヲ立テ儉素ヲ守ルヘキ事 ……以下略

をうたっているが、柏木参事はそれをひっくり返して、武芸停止の触れを出したのである。戊辰の蹉跌で屈折した旧小田原藩士は、明治十年前後になると再び道場が市井に開かれ、武芸稽古が行われるようになる。それは、小田原藩領の終戦処理がついて、足柄東の任務も終り、行政が神奈川県(一部静岡県)に吸収され、県令が柏木忠俊から大江卓に交替する時期に当たっているが、武芸稽古が復活する大きな要因は、明治十年、西郷隆盛を擁して薩摩の不平士族が起こした西南戦争という時代背景がある。しかし、西南戦争には、小田原の人びとは、ほとんど参加しなかったようだ。

春日局と平川門

西山銚太郎

春日局と云へば江戸城大奥で権勢を誇った人であるが、或時用事で外出をし夜おそく帰って来た。城門は閉ざして入れない。供の侍女が「春日のお局様の御帰城である。開門、開門」と云つても門番は「門限はとくにすぎてるから開ける訳にはいかない」と云う。虎の威をかる狐の侍女は怒って「お局様がお帰り

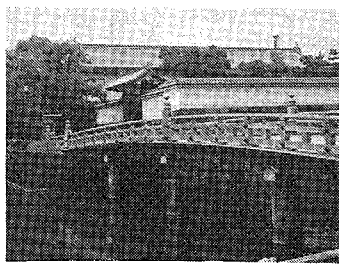
だ」と云うのに開門しないと何事か」と云う。「それなら上司にお許を得て来るからしばらくお待ちを」と云つてお伺いに行つた。その間春日局一行は寒い風に吹かれて待っていた。これは大正時代「規則をまもれ」と云う事を教えた小学校教科書の話である。その春日局主従が閉め出しを喰ったのが平川門である。平川門は江戸城大奥に一番近かったので、大奥の女達はよくこゝを

使用した。平川門は一名不浄門と云はれ、城内の不浄物と死者等城外に運び出された。忠臣蔵で名高い播

州赤穂の浅野の殿様は、殿中で刀を抜き吉良上野介に切りつけた。随つて登城の時には大名だから他の大名と同様堂々と正門から入って来たが、帰りは罪人なので、この不浄門と云はれる平川門から出された。平川門は、日本丸と北の丸公園のまん中を通る代官町新道の東端で、堀を渡る竹橋のすぐ南側に平川橋、これを渡ると平川門である。今日では日本丸は皇居東御苑と云はれ、時を決めて一般に解放されている。

「……西南役に関しては町民の傾向、出征者に対する恤兵等も徴すべき文書なく殆ど不明なるも、政府筋より旧藩士に對し別働隊として徴募巡査の交渉有りしも未だ実現に至らざるに(?)」筆者注「戦況一変し中止となりしのみなら

平川門



ず、当町より従軍の兵員も極めて少数にて人心を衝動する程には非りしか如し」

〔明治小田原町誌〕

『明治小田原町誌』の編著者片岡永左衛門は、万延元年(一八六〇)、小田原本陣片岡家に生れ、西南戦争のときは十八歳頃。時代の証言者でもある。

現在は、小田原市城山の小田原高校の南西に隣接する場所に置かれた、「靖献之碑」(明治十一年二月、始めは、小田原市本町二丁目松原神社内に所在)からも片岡永左衛門の記述は裏付けられる。この碑は、戊辰・西南の高

戦争の戦死者の供養塔で、神奈川県下で一番古い忠魂碑でもあるが、西南戦争の戦死者は、先に記した華族従五位陸軍伍長大久保忠良のほか、足柄上下両郡の二十四名で、うち旧小田原町内は五名、いずれも士族出身、他は皆村むらの農民出身である。

西南戦争は武力をもって政府を倒し得ないことを証明した大きな出来事であっても、小田原の人びとの多くは、遠い国の出来事のように受けとめていたかもしれない。戦死した士族のうち二名は、新選旅団四等巡査心得という肩書があり、薩摩憎しと従軍したかも知れないが、士族の中には、うちひしがれた生活にあっても希望を子供に託し、

教育に力を入れた者もいる。坂本易徳の親もその一人である。道場通いも当時の学校では座学のみで、また、武芸や体操は取り入れておらず、武芸を通じての身体鍛練の目的があったろう。

明治十四年(一八八)の春先、透谷は、啓蒙学校を卒業する前に、一家と共に東京へ移住したので、二人の交際は絶えることになる。

易徳は、啓蒙学校を卒業すると共に、小田原中学校に入學した。と、いっても、現在の小田原高校の前身、神奈川県立小田原中学校ではない。

この中学校の沿革をみると、明治初年迄(溯ることになる。明治二年(一八六)四月、小田原藩主大久保忠良が藩士の子弟のために、旧地方役所に英学校を創設し、また、同五年四月十三日に、小田原早川口の大久保家浜御殿内に中学校が開かれていた。中学校といっても、ちやちやものであったろうが、ともかく、この二校は小田原地方の中等教育の原流ということになる。

英学校は、明治七年七月に、小学校教員養成の目的のため、(小田原)講習所と改称されたが、明治九年十一月に廃止され、かわって小田原師範学校が置かれ、師範学校に中学校が併設された。しかし、永統せず同十二

年十月三十日、師範学校は廃止の運命となる。代って支持基盤の拡大ということで、足柄下・上両郡・大住・海綾・愛甲郡の五郡共立の公立小田原中学校が、旧師範学校の校舎敷地、書籍器具と神奈川県原資金の下附を受け、設立された。

易徳が入学したのは、この公立小田原中学校である。入学の時期は、明治十三年、四年(一八八)頃と推定される。だが、易徳は中途で(その時期は明らかではないが)、あるいは下等中学終了の同十六年前後かもしれない、その頃上京している。

この公立小田原中学校は、明治十九年(一八八)二月廢校となっている。そして、明治三十四年

(一九〇)四月、神奈川県立小田原中学校が、始め県立第二中学校として設立される迄の十五年間、小田原には中学校は存在せず、空白のままであった。

このような例はあまり聞かない。坂本易徳が、後に教員として勤務する高知県立高知中学校の前身は、明治七年(一八七)旧藩校に設立された陶治(たうぢ)学舎の予備生徒を養成する目的で設けられた、付属変則中学校で、同九年高知師範学校変則中学校と改称、同十一年十一月、県立高知中学校として分離独立し、現在、県立高知追手前高等学校として継承されている。

会員消息

◎「昨」秋の紋勲・褒賞で、大井諦玄氏は勲六等单光旭日章を、清水伊十郎氏は藍綬褒章を受賞。おめでとございます。

◎宝安寺(望月郁文師)に「念ずれば花ひろく」の詩(坂村真民)碑の除幕式が昨年十月三十一日行われました。

◎中村静夫氏(中村地図研究所長)今回『箱根歴史地図』英語版を刊行されました。

◎中島まさ氏、本会創立三十周年記念に実施の「東海道五十三

次宿場史蹟めぐり」の折々の歌を詠まれてきましたが、そのままでは惜しいと周辺からの声がありました。

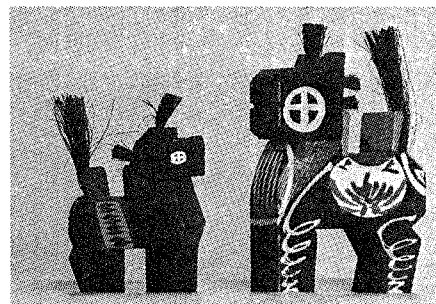
◎東華軒(飯沼寛雄社長)の地上五階、地下一階の新本社工場が、小田原市西酒匂一三二五(四)酒匂川左岸)に完成、昨年十一月十八日(日)落成披露が行われ、東華軒はグループ名を冠した「ハローズ東華軒」の呼称となりました。

◎ヤオマサ株式会社(田嶋享社長)では、新規事業として、小田原市鴨宮三五五―一八に書籍

田原と同じく足柄県であった葎山に、明治六年(一八七)設立の葎山講習所対岳学校は、その後組織や名称は変わっても、中断されることなく、静岡県立葎山高等学校として継続している。

小田原中学校の中途での廢校は、当時の小田原の衰退ぶりを象徴的に示すもので、その地盤の沈下は覆うべくもなく、有識者の嘆きのほどは、『函東報告誌』に記録されている。なお、この『函東報告誌』創刊号当時の編纂者は、坂本易徳である。このことは、後で再び取りあげたい。

ところで、小田原の衰退の原因は、どこにあったのだろうか? (続)



落穂集

◎井上三綱画伯の『古事記萬葉画集』から馬の絵転載については、赤岩賢三画伯のお骨折りを頂きました。
 ◎「物置より龍が出た」の川瀬速雄氏、まだまだ資料をお持ちのよう期待しております。
 ◎「酒匂神社のルーツについて」の川瀬春雄氏、眼を

悪くされていて、原稿は、お孫さんが浄書された由、お骨折りに深謝致します。
 ◎六年ぶりに発行の「会員名簿」会報と共に配付です。◎昨年七月二十七日(木)、真鶴方面史蹟めぐりの事前計画には、「真鶴町郷土を知る会」前会長松本敬氏、現会長桜井光夫氏のご援助あり、また、コースの下見に、松本前会長が同行され、指導を頂きました。厚く御

礼を申しあげる次第です。◎何号か前のこの欄で、日々の新聞折込広告を集計して楽しんでいる人のことを伝えましたが、その人Aさんに、近頃の傾向を尋ねましたところ、人出不足を反映して、求人情報の数が大幅に増加し、昨年十月には、静岡原小山町の求人情報社が新規参入の由です。情報折込数の月平均は次の通りであるとの事。
 求人 情報紙 企業 独自
 昭和三年 一六・五枚 三・七枚
 三年 一八・五 四・六
 六年 一六・一 六・〇
 平成元年 一〇・九 六・九
 (十一月迄)
 増加の傾向は、昨年七月頃からで、特に本年七月頃からは顕著だとの話です。「求人情報の増減は景気変動の指標になる」と、Aさ



前正大正大地震の恐ろしさを経験しただけに、耐震に心配りをしたものでしょう。それにしても、土木機械・技術が充分に発達していない時代です。石垣の取りはずしての工事は、大変なものでしょう。

特別賛助会員

- 店造 相田酒造 智恵袋
- 廊画 アオキ 小田原銀座
- 株式会社 足柄香粧株式会社
- 飛鳥 魚屋
- 紳士服の アメリカヤ
- 画材 ガクブチ めうえ
- 伊勢治書店
- かまぼ 株式会社
- 江島市場
- 小田原ガス
- 小田原信用金庫
- 小田原報徳自動車
- オートセンター・スギヤマ
- 小田原中央青果
- かまぼこ 籠
- 令 学 施
- 鐘紡株式会社小田原工場
- 力木ボウ化粧品鴨宮工場
- かみやま小児科クリニック
- 興電社
- 清水甘納豆

- 正 榮 堂
- 鈴木 廣 木まほこ
- 反寿堂スポーツ
- 大 営 不 動 産
- 割烹 おる 海
- 茶半家具株式会社
- ちんぎょう本店
- 角田ガクブチ店
- 八口ーズ東華軒
- 八小堂書
- 八子マ
- 八平井書
- 富士写真フィルム製小田原工場
- 株式会社 報 徳 屋
- 松坂丸
- 学生専科
- 食器の店 マルサンストア
- 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
- ヤオマサ株式会社
- 山口菓子舗
- 湯浅電池 株式会社 小田原工場

◎さる九月十七日(日)の小台・蓮乗寺の仏像拝観には、六十二名が出席。本堂に於て、和田登氏の司会で、まず松蔭徳誠師の説話、相澤会長の挨拶、高田喜久三・曾我保夫両氏の仏像の見方

ましたが、六年前に大正大地震の恐ろしさを経験しただけに、耐震に心配りをしたものでしょう。それにしても、土木機械・技術が充分に発達していない時代です。石垣の取りはずしての工事は、大変なものでしょう。

について解説、続いて観音堂に於て、徳誠師の説明で聖子易観音像を拝観後、本堂に戻ると、寺特注の饅頭を頂きながら協議。特に伊勢原から馳せ参じた佐野弥太郎氏の、足柄平野耕地整理事業の最高責任者として活躍した往時の回顧談あり、盛会のうちに終了しました。◎十月十四日(出)の市内山王原・網一色方面の探訪(宗福寺・山王神社・本久寺・小田原城外郭土塁跡・一里塚・北条稲荷・戒神社・上杉龍若丸墓・新田義貞墓塚)に四十七名参加。案内役の和田登氏発熱でダウン、代って高田喜久三・岡部忠夫・小野意雄の三氏が説明しました。

(陶生)